

第四章

「シタ」と「hayss-ta(했다)」

1. はじめに

本章では、現代韓国語の「hayss-ta(했다)」と現代日本語の「シタ(動詞に「タ」が下接した構文成分)」について、「文法化(grammaticalization)」という概念と関連づけて考察を行う。

「hayss-ta」は、動詞語幹に「-ess(였)-」が下接した構文成分であり、「-ess-」は現代日本語の「タ」に相当する。

- (1)a mek-ta(먹다; 食べる) > mek-ess-ta(먹었다; 食べた)
- b po-ta(보다; 見る) > po-ass-ta(보았다; 見た)
- (2)a ka-ta(가다; 行く) > ka-ss-ta(갔다; 行った)
- b ha-ta(하다; する) > ha-yess-ta(하였다; した)
- hayss-ta(했다; した)
- c o-ta(오다; 来る) > o-ass-ta(> wass-ta)(왔다; 来た)

例えば、(1)aの「mek-ta」は、動詞語幹「mek-」に「-ess-」が下接し、「mek-ess-ta(먹었다)」という構文成分になる。「-ess-」には、(1)bのような「-ass(았)-」という異形態(allomorph)がある。(2)に示すように、「-ess-」の付加される末尾音節が母音語幹の場合は、「-ess-」・「-ass-」が「-ss-」・「-yess(였)-」などに縮約される場合がある。以下では、「mek-ess-ta」「po-ass-ta(보았다)」等の「動詞語幹-ess-ta」をまとめて「hayss-ta」形と呼ぶことにする。

2. 「シタ」と「hayss-ta」について—概観—

2.1. 「タ」と「-ess-」の歴史的な成立過程

2.1.1 「タ」

現代日本語において過去を表す形式は、「タ」という形式一つであるが、古代日本語においては、「キ」「ケリ」「ツ」「ヌ」「タリ」「リ」等、少なくとも六種の形式が過去の表現に関係している。古代語におけるこれらの形式がどのようにして現代日本語の「タ」に統合していったのかという問題は、現代語の「タ」を把握する際にもとても重要な問題である。結果的には、「ツ」「ヌ」「キ」

「ケリ」「リ」は、歴史的な変化の過程で消滅しているのに対し、「タリ」からは、現代日本語の「タ」ができるという歴史的な変化を経て現在に至っている。^{*1}

- ・「ツ」 → 消滅
- ・「ヌ」 → 消滅
- ・「キ」 → 消滅
- ・「ケリ」 → 消滅
- ・「タリ」 → 「タ」 (「テアリ」 → 「タリ」)
- ・「リ」 → 消滅

また、「タリ」は「テアリ」からできている、という歴史的な事実を考え合わせてみると、上(下線を引いてある部分)で示した「テアリ」>「タリ」>「タ」という歴史的変化については、(3)のようにまとめられる。

- (3) 「テアリ」 → 「タリ」 → 「タ」
「テアリ(上代語)」 → 「タ(現代日本語)」
- | | | |
|-----------------|---|----------------------------------|
| ・ 状態を表す不完了的意味から | → | ・ 運動の完成を表す意味へ
(そのアスペクト的意味の変化) |
| ・ 現在を表す意味から | → | ・ 過去を表す意味へ
(そのテンス的意味の変化) |

なお、金水(1996b)では、(3)に示した変化をめぐって具体的にはどういう変化であったかという問題について(4)のように説明している。

(4) 金水(1996b, p. 59)

～テアリ[存在]>～タリ[已然態・進行態・パーフェクト相(メノマエ性)]
>～タリ[已然態・進行態・パーフェクト相・完成相(メノマエ性)]>～タ
リ・タ[已然態・パーフェクト相・過去)]>～タ[過去・パーフェクト相]
(進行態：主語である動作主の存在 / 已然態：出来事の直接的な結果の存在 / メノマエ性：空間的な現前性)

*1 「キ」「ケリ」「ツ」「ヌ」「タリ」「リ」に関するより詳しい説明は、鈴木(1992)と鈴木(1993)を参照されたい。

・存在文＞進行態/已然態/メノマエ性＞パーフェクト相など＞過去など



変化の進行方向(矢印は、安によるもの)

(4)には、特に「タリ」形式について注目して見ると「已然態」と「進行態」が衰退していく変化過程および「完成相」用法の出現、それから「(タリ＞)タ」形式の出現とともに「過去」を表す用法が現れるという変化過程がはっきりと示されている(アスペクト形式からテンス形式への文法化の流れ)。

一方、(4)の歴史的変化と関連し、金水(1983)では、このような変化を引き起こすことになったもう一つの要因として、中古以来、動作継続を表す形として発展してきた「テキタリ(>テイル)」という形が、室町期ぐらいまでは結果状態を表す意味を十分に獲得していなかったため、それを補う意味で結果状態を表す本来の形として「タリ」が必要とされていたという事情があったと考えられると説明している。

なお、金水(1996b)では、このような一連の変化を、(5)のようなアスペクト形式を構成する「存在動詞」の「文法化」の過程としてとらえている。

(5)存在動詞の「文法化(grammaticalization)」

「今」「ここ」における対象の存在が強く含意されるほど原型的の意味に近く、「今」「ここ」が薄まるほど、文法化が進んでいる。(p. 59)

以上の内容をごく簡単にまとめると、日本語の場合は、「テアリ」における「アリ」の固有の語彙的意味(存在の意味)が薄れていく(文法化する)ことによって現代日本語の「タ」が成立したということになる。^{*2}

2.1.2 「-ess(읏)-」^{*3}

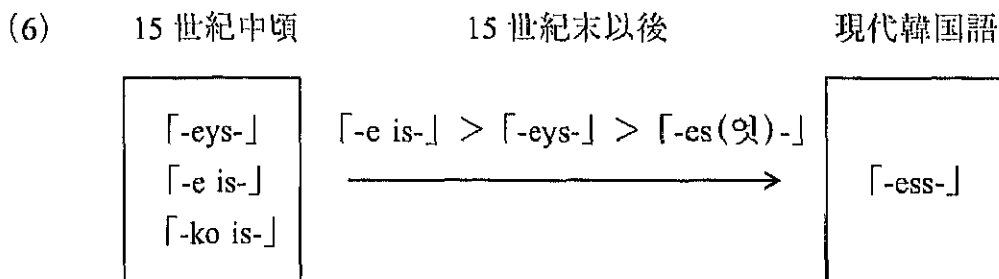
中世韓国語のテンス・アスペクトを表す形式の中で「-ko is(고 잇)-」「-e is(어 잇)-」と「-eys(읏)-」という形式だけを取りあげ、現代韓国語の「-ess(읏)-」

*2 日本語の「タ」の歴史的な変化過程については、福嶋健伸(筑波大学大学院)氏との議論がたいへん有益であった。福嶋健伸氏に感謝申しあげる。なお当然ながら、本章における不備・誤りの責任は筆者に帰せられるものである。

*3 「-ess-」の歴史的な成立の詳細については、河野(1946)、河野(1951)、李基文(1961)、李承旭(1973)、I, Ki-Kap(1981)、菅野(1986)、韓東完(1986)、李勇(1992)、崔東柱(1995)などを参考になっている。

との関連について概観する。これらの形式は「is-ta(잇다)」という存在動詞が補助動詞として用いられている点において共通する。^{*4}

形態的な観点から見ると、ハングル(한글)が創製された 15 世紀において、現代韓国語の「-ess-」の成立に直接関連がある形式といえは「-e is-」と「-eys-」があげられる。また、当時は「-ko is-」と「-e is-」と「-eys-」が共存していた時期である。^{*5} 現代韓国語の「-ess-」が成立する過程を簡単に示すと(6)のようになる。



中世韓国語において「-ko is(고 잇)-」は、まれながら存在していた。^{*6} また「-eys-」は「-e is(어 잇)-」の縮約形であるが、中世韓国語における母音「ey(에)」は二重母音であったという事実を考え合わせてみると、「-eys-」は「-e is-」と同じように発音されていた(表記上の縮約形)と考えられる。^{*7} 例えば、I, Ki-Kap (1981)では、縮約形「-eys-」は「-e is-」の自由変異形(free variant)にすぎない

*4 「-ko is-」と「-e is-」は、補助的連結語尾「-ko(고)」 「-e(어)」と当時における存在動詞「is-ta(잇다)」で構成される。「補助的連結語尾」という用語は、高永根(1985)の名称にしたがう(pp. 120-127)。韓東完(1986)では、「副動詞語尾」としている(p. 218)。なお、「(-e isi(어 이시)->)-isi(이시)-)」という形式も「-ess-」の文法化過程に入れて考える場合もある(韓東完(1986)、崔東柱(1995)など)。しかし、本稿では、これらの形式については、「接続語尾(어)+存在動詞(si-ta(시다))」を構成する「si-ta」という存在動詞は完全に消滅してしまっており、現代韓国語との関連性を考えられないため、考慮の対象としない。

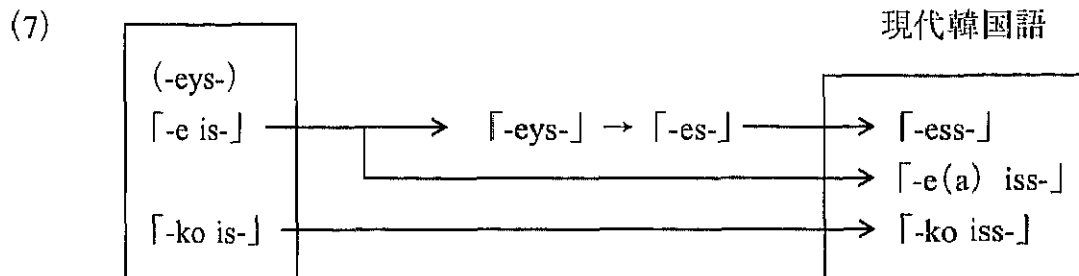
*5 15 世紀の韓国語(中世韓国語)には、テンス専用の文法形式が存在しなかった。高永根(1981)によると当時の韓国語では発話時から切り離された、いわゆるアオリスト的な過去のことは「発話時基準・不定法(簡単に言えば「 ϕ (ゼロ形式)」)」か「経験時基準・回想法(-te(더)-)」 「推測回想法(-lile(리러)-)」で表している(pp. 71-84)。

*6 高永根(1981, pp. 200-203)を参照されたい。

*7 「二重母音」に関しては、許雄(1952)、李崇寧(1954)、金完鎮(1964)、李基文(1972)などを参照されたい。

としている。^{*8}

15 世紀末以後における「-e is(어 잇)-」>「-eys(옛)-」>「-es(옛)-」という変化について簡単にまとめてみると、(7)のようになる。



15 世紀の「-e is-」は、形容詞・自動詞・他動詞と結合していたが、17 世紀前後になると「-e is-」の分布が急激に縮小していくのに対し、「-es-」の分布が拡大し、18 世紀には「-es-」が過去の意味を表すようになっている。^{*9} 一方で「-ko iss(고 잇)-」の分布も拡大している。

このような変化が起こった理由としては、まず「二重母音の単母音化」があげられる。二重母音が単母音化することによって、存在動詞「is-ta(있다)」が発音されなくなり(存在動詞が認識されなくなり)、急激に文法化が進んでいったと思われる。ここで注意しなければならないのは、縮約形は文法化していく(「-eys(옛)-」>「-es(옛)-」>「-ess(옛)-」)のに対し、「hay iss-ta(해 있다)」形は、ほぼ原型のまま現代韓国語に残っている(「-e is(어 잇)-」>「-e iss(어 잇)-」)という事実である。この問題について論文の後半でまた触れることにする。

以上の内容をごく簡単にまとめると、韓国語の場合は、中世韓国語の「-e is-」における「is-ta」の固有の語彙的意味(存在)が薄れていく(文法化する)ことによって現代韓国語の「-ess-」が成立したということになる。

*8 許雄(1977)では、「-e is-」に比べて「-eys-」のほうが完結持続の意味を表す程度が弱い(弱化している)であろう、と主張している。なお、その理由については、「is-ta」の存在が外形上、はっきり現れていないからであると説明する。許雄(1977)のように、「-e is-」と「-eys-」の間には一部違いがあるとする説もある。

*9 李基文(1961)によると、『三譯總解(1703 年刊)』に「mwullichyes-ta(2. 5)；退けた」等のように過去を表す例が見られるという。なお、近代韓国語(17 世紀初～19 世紀末)の時制に関する研究史に関しては、Ceng, Yu-Cin(1998)が詳しい。

2.1.3 2.1.節のまとめ

現代韓国語の「-ess(엿)-」は、歴史的に(「-e is(어 잇)-」>「-eys(옛)-」>「-es(엇)-」>「-ess-」)という変化を経て現在に至っている。中世韓国語の「-e is-」は、現代韓国語における「-e iss(어 잇)-」の祖形であり、中世韓国語の「is-ta(잇다)」という存在動詞が補助動詞として用いられている。なお、「-e is-」という形から存在動詞が文法化することによって「-ess-」が成立している。このように現代韓国語の「-ess-」は、日本語における(「テアリ」>「タリ」>「タ」)の歴史的な変化過程とかなり類似していることがよく分かる。

2.2. 現代日本語における「シタ」について

2.2.1 過去(完成相過去)

現代日本語でアクチュアルな事態を表現する場合、「スル」形は非過去を表し、「シタ」形は過去を表すのが一般的である。このように「シタ」の基本的なテンス的意味は、過去(発話時より以前)に動作が完成したことを表すことである。また、「シタ」の基本的なアスペクト的意味は、動詞の表す動作またはその一定の局面を、開始から終了まで含めた全体を点的にとらえて表すことである。

- (8)a 明日は、筑波山に遊びに行く。 : (完成相)非過去
b 昨日は、筑波山に遊びに行った。 : (完成相)過去

(8)b は、「筑波山に遊びに行く」という動作(動詞の表す動作またはその一定の局面を開始から終了まで含めた全体)が、発話時より以前に行われたということを表す。鈴木(1979)では、(8)b のような「現在と切り離された過去のタ」を「アオリスト的な過去」としている。

2.2.2 いわゆる「完了のシタ」(パーフェクト相現在^{*10})

- (9) きみ、しばらく見ないうちに、きれいになった(なっている)ね。
(10) この一年で随分、家がふえました(ふえている)ね。

(9)(10)は、先行して起こった出来事によってもたらされた結果・効力が「設定時点=発話時点」においても有効であることを含意するという点で、(8)b

*10 「パーフェクト」に関する定義は、工藤(1989)、工藤(1995)にしたがう。

のような「完成相過去」の表現とは異なる。これらの例は、アスペクト的にはパーフェクトで、テンス的には現在(発話時と設定時が同時)である。寺村(1971)が「完了のタ」と呼んでいる例であり、以後盛んに議論されてきている。鈴木(1979)では、いわゆる「完了のシタ」を「ペルフェクト的な過去」とし、「過去のタ(アオリスト的な過去)」と区別しているが、工藤(1989)・工藤(1995)では、この「完了のシタ」を「彼は三年前に韓国を訪れている。」のような「シテイル」とともに、「パーフェクト相現在」として位置づけている。なお(9)(10)は、括弧の中に示したように「シテイル」形に言い換えられる。

2.2.3 その他—いわゆる「ムードのタ」—

- (11) (何か物を探していて)あれ、こんなところにあった。(発見)
- (12) そういえば、そんな歌があったなあ。(想起)
- (13) ちょっと待った。(差し迫った要求)
- (14) きみがいなければ、今ごろ大騒ぎだった。(反事実)

現代日本語の「シタ」には、「完成相過去」と「パーフェクト相現在」を表す用法以外にも、「発見」「想起」「差し迫った要求」「反事実」等を表す用法がある。

2.3. 現代韓国語における「hayss-ta」について

現代韓国語の「hayss-ta(했다)」の表す意味については、先行研究の立場によってかなり意見が分かれているが、本章では「hayss-ta」にはテンスとアスペクトの両方の用法がある、という立場をとる。^{*11}

2.3.1 過去(完成性過去)

- (15) 다로는 (어제) 라면을 먹었다.
talo -nun (ecec) lamyen -ul mek -ess-ta
太郎は (昨日) ラーメンを 食べる タ
太郎は(昨日)ラーメンを食べた。

*11 「hayss-ta」については、①(排他的な)テンスマーカーと見る立場、②(排他的な)アスペクトマーカーと見る立場、③時相を表すマーカーと見る立場、のように大きく三つに分けられる。

(15)は、「mek-ta(먹다)」に「-ess(었)-」が付加されることによって、特別な文脈を想定しなくても当該の出来事(「太郎がラーメンを食べる」)が発話時より以前(過去時)に行われた、という意味として解釈することができる。また、同一文中に(15)の括弧の中に示した「ecey(어제)」のような成分—発話時(今、ここ)から見て、発話時と出来事との時間関係がはっきり分かる成分—があれば、(15)の「mek-ess-ta(먹었다)」が「発話時より以前(過去)の状況」を表すということがもっとはっきり分かる。

(15)の例から分かるように、現代韓国語の「hayss-ta(했다)」には、「完成性過去」を表す用法がある。

2.3.2 パーフェクト性(未来・現在)

- (16) (例えば、相手を脅かしている場面)

넌 내일 죽었다.

ne-(nu)n nayil cwuk -ess-ta

君 は 明日 死ぬ タ。

君は明日死んだも同然だ。

- (17) 대진표를 보니 이번 대회는 우리가 우승했다.^{*12}

taycinphyo-lul po -ni ipen tayhoy-nun wuli-ka wusunghay -ss-ta

対戦表 を 見るタラ この大会 は 我々が 優勝 するタ

対戦組み合わせ表を見たら、この大会は我々が優勝したも同然だ。

- (18) 우리는 앞으로 자유를 잃었습니다.

wuli -nun aph -ulo cayu-lul ilh -ess-supnita

私たちは これから自由を 失うタ 丁寧語尾

私たちはこれから(将来)自由を失ったも同然です。

(15)とは対照的に、(16)(17)(18)は、述語に「-ess-」が付加されているにもかかわらず、「cwuk-ess-ta(죽었다)」などが決して過去の状況を表すことはない。(16)が過去の出来事を表さないことは、同一文中に「nayil(내일)」という時間副詞が共起していることから明らかである。(16)では、設定時点において—ここでは、「nayil」という設定時点—当該の出来事、つまり「君が死ぬ」という出来事が完成していることとして把握している。(16)は、アスペクト的

*12 (17)(18)は、崔東柱(1995)からの再掲である。(p. 194)

にはパーフェクトで、未来(発話時を基準にして設定時が以後)というテンス的要素を含み込んでいる。なお、(16)は、先行して起こった運動が設定時点との結びつき＝関連性(current relevance)を持っているととらえられていること、つまり運動自体の完成性とともにもその運動が実現した後の効力も複合的にとらえている。(17)(18)についても同様なことが言えるであろう。^{*13} このように現代韓国語の「hayss-ta(했다)」形には、いわゆる「未来パーフェクト」の用法がある。

(19) 저는 이미 결혼했습니다.

ce-nun imi kyelhonhayss -supnita

私 は 既に結婚する タ 丁寧(ます)

私は既に結婚しています。

(19)も(16)と同様に、「hayss-ta」形であるが過去の状況を表すことはない。(19)のような文は、先行して起こった出来事によってもたらされた結果(効力＝既婚者であること)が設定時点(ここでは発話時と一致する時点である。なお、設定時点と発話時が一致するという意味で現在である)にも有効である、という意味を表す。このように現代韓国語の「hayss-ta」形には、いわゆる「現在パーフェクト」を表す用法がある。

しかし、(19)に関連して注意しなければならないことは、(20)のように「hako iss-ta(하고 있다)」・「hay iss-ta(해 있다)」形(現代日本語の「シテイル」にあたる)では、表現できない、という事実である。この意味で、現代日本語の「パーフェクト相現在」の場合とは対照的である—現代日本語では、(9)(10)のように「シテイル」形でも表すことが可能である。このように現代韓国語は、「パーフェクト相現在」を「hako iss-ta」・「hay iss-ta」形で表すことができない場合がある。

(20) *저는 이미 결혼해 있습니다. (*결혼하고 있습니다.)

ce-nun imi kyelhonhay-iss -supnita (*kyelhonha-ko iss -supnita)

私 は 既に 結婚するテイル丁寧(ます)(結婚する テイル 丁寧(ます))

(訳文省略)

*13 例えば、任七星(1990)によると(16)については「未来状況の叙述」として説明している。(p. 281)

2.3.3 単純状態

- (21) 다로는 아버지를 닮았다. (*닮고 있다 / *닮아 있다)

talo -nun apeci -lul talm-ass-ta (*talm-ko iss-ta / *talm-a iss ta)

太郎 は 父 を 似る タ (似る テイル / 似る テイル)

太郎はお父さんに似ている。

- (22) * 太郎は父に似た。

現代日本語とは対照的に、「hayss-ta(했다)」形には、(21)のように「単純状態」を表す用法がある。(22)のように、現代日本語は、単純状態を「シタ」形で表現することはできない。現代韓国語の場合は、逆に、単純状態を表す表現のうち「hako iss-ta(하고 있다)」・「hay iss-ta(해 있다)」形(現代日本語の「シテイル」にあたる)では表現できない例が存在する。「単純状態」を表す場合については、3.節以下で詳しく述べることにする。

2.3.4 その他—いわゆる「ムードの「hayss-ta」」—

- (23)택의 전화번호는 몇번이었죠? (菅野(1986)の再掲) (想起)

tayk-uy cenhwapenho-nun myechipen i -ess -cyo

お宅の 電話番号 は 何番 だ タ 疑問

お宅の電話番号は何番でしたっけ?

- (24)아, 여기 있었네. (発見)

a, yeki iss -ess-ney

あ、ここ(に)ある タ

あ、ここにあった。

- (25)너는 내일 소풍에 다 갔다. (任七星(1990)の再掲) (慣用的な表現)

ne-nun nayil sophwung-ey ta ka -ess-ta

君 は 明日 遠足 に 全部行く タ

君は明日遠足には行けないよ。

上の例のように、現代韓国語の「hayss-ta」には、「想起(伊藤(1990)は、回想と分類している)」「発見」「慣用的な表現(「ta hayss-ta(다 했다)」という形で用いられる。任七星(1990)では、「未来否定」の「hayss-ta」としている)」などを表す用法がある。

2.4. 2.節のまとめ—日韓対照—

「-ess(였)-」と「タ」は、両方ともに、存在型アスペクト形式(「テアリ」と「-e is(어 잇)-」)から歴史的な変化過程において生まれている。なお、その歴史的な変化過程は、存在動詞(「アリ」と「is-ta(있다)」)の文法化過程とも言える。このように、日韓両言語における「hayss-ta(했다)」と「シタ」には、歴史的な観点から見るとかなり共通する部分が多い。しかし、典型的な「単純状態」や「パーフェクト相現在」を表す表現をめぐっては、両言語間に次のような違いが見られる。^{*14}

(26)

	現代韓国語	現代日本語
単純状態	「hayss-ta」形	「シテイル」形
動作パーフェクト相現在	「hayss-ta」形	「シタ・シテイル」形

両言語にはなぜこのような違いがあるのか、という問題に適切な説明をすることが本章の最終的な目的である。

以下では、「hayss-ta」形が「現在の状態」の意味を表す場合について詳しく考察する。^{*15}

3. 「現在の状態」を表す「hayss-ta」について

本節では、現代日本語の「シタ」形にあたる、現代韓国語の「hayss-ta」形が、(21)のように「現在の状態」の意味を表す場合について考察する。

- (21)a 다로는 아버지를 닮았다. (*닮고 있다 / *닮아 있다)
 talo -nun apeci -lul talm-ass-ta (*talm-ko iss-ta / *talm-a iss ta)
 太郎 は 父 を 似る タ (似る テイル / 似る テイル)
 太郎はお父さんに似ている。

*14 ここで「典型的である」というのは、非存在文的であることを意味する。詳しいことは、後述する。

*15 ここでいう「現在の状態」とは、具体的に「単純状態」と「パーフェクト相現在」のことを指す。

(21)b 다로와 지로는 얼굴이 닮았다. (*닮고 있다 / *닮아 있다)

talo -wa cilo -nun elkwul-i talm -ass-ta (*talm-ko iss-ta / *talm-a iss ta)

太郎と 次郎 は 顔 が似る タ (似る テイル / 似る テイル)

太郎と次郎は顔が似ている。

(21)は、現在の状態を表す文である。つまり、(21)a は「太郎」の現在の属性を表しており、(21)b は「太郎と次郎の顔」の現在の属性を表している。現代韓国語では、(21)a と(21)b のように、現在の状態を表す文であるにもかかわらず、現代日本語の「シタ」形にあたる「hayss-ta(했다)」形が用いられるケースがある。(21)のような文をめぐって、もう一つ注意しなければならない問題がある。例えば「talm-ta(닮다)」は、(21)の括弧の中に示したように、一般的に文法的な状態化マーカーと言われている「hako iss-ta(하고 있다)」形、「hay iss-ta(해 있다)」形とは共起できず、「hayss-ta」形による表現しか成立しないという現象である。

以下では、(21)のような文は、なぜ文法的な状態化マーカーである「hako iss-ta」形、「hay iss-ta」形と共起できないのか、また「hayss-ta」形による表現しか成立しない理由は何か、という問題について考察する。

この問題に関しては、先行研究においては主に以下のような説明が行われている。

まず、「talm-ta」が文法的な状態化マーカーである「hako iss-ta」形とも「hay iss-ta」形とも共起しない理由について、「talm-ta」を状態動詞というアスペクトクラスとして分類することで処理しようとする立場である。状態動詞は、もともと時間的な展開性がないため、文法的な状態化マーカーとは共起しないという説明である(油谷(1978)、李南淳(1981)、李智涼(1982)、浜之上(1991)等)。

しかし、後述するように「talm-ta」を状態動詞とするためには、解決しなければならない問題がある。仮に、先行研究の指摘のように「talm-ta」は状態動詞である、と仮定してみても、「talm-ta」は状態動詞なのになぜ「hayss-ta」形で表現しなければならないか、という問題は依然未解決のまま残っている。なぜなら、典型的な状態動詞である「iss-ta(있다)」等は、決して「hayss-ta」で現在の状態を表すことはないからである。なお、詳しく調べてみると、(27)の「tachi-ta(다치다)」のような、一般的には状態動詞とは考えられない動詞でも「hayss-ta」形で(しかも「hako iss-ta」形とも「hay iss-ta」形とも共起しない)現在の状態を表す場合があり、(27)のような例の存在を考え合わせると、先行研究の説明は部分的な説明にしかならないことが分かる。

(27) (今現在、松葉杖をしている寅鎬について語る場面)

a 인호는 넘어져서 다리를 다쳤어. (*다치고 있어 / *다쳐 있어) (홍)*¹⁶

in-ho-nun nemeci-ese tali -lul tachi -ess-e(*tachi -ko iss-e / *tachi -e iss-e)

(人名)は 転ぶ て 足 を怪我するタ(*怪我する テイル / *怪我する テイル)

(人名)は転んで足を怪我した(怪我している)。

b 인호는 넘어져서 다리가 크게 다쳤어. (*다치고 있어 / *다쳐 있어)

in-ho-nun nemeci-ese tali ka kukey tachi -ess-e

(人名)は 転ぶ て 足 が大きく 怪我する タ

(人名)は転んで足を大怪我している。

以上では、「talm-ta」について述べたが、「nulk-ta(늑다)」を述語とする(28)も、前述した(21)と同様に文全体は「現在の状態」の意味であり、また、括弧の中に示したような(主体の属性を表す)文脈では、「hayss-ta(혔다)」形しか成立しない。(28)に関しては、まず、「nulk-ta」を「状態動詞」とする説明があり得る。しかし、この説明では(28)と、以下に示す(30)の違いについて説明できないという問題がある。実際、浜之上(1991)では「nulk-ta」について「状態性動作動詞」として分類するが、(28)と(30)の区別ができない点を問題点として指摘している。(p. 82)

(28) (例えば、親友の髪の毛に白髪が目立つようになった。それに気づいた友達が)

너도 이제 늑었다. (*늑고 있다 / *늑어 있다)

ne -to iceyn nulk -ess-ta(*nulk -ko iss-ta / *nulk -e iss-ta)

お前も もう 老いる タ (*老いる テイル / *老いる テイル)

お前ももう老けているね。

また、(21)(28)のような例をめぐっては、先行研究で次のような説明が行われている。まず、(21)(28)のような「hayss-ta」形による現在の状態を表す表現は、周辺の(二次的)であって、あくまでも過去という基本的な意味から派生していると説明する立場がある(伊藤(1990))。詳しくは後述するが、過去からの派生とする説明には問題がある。

もう一つは、例えば「nulk-ta」等の動詞には、主体の変化する過程(生まれ

*16 (27)a と(27)b は、홍 재성(Hong, Cay-Seng) (1997)から引用している。

(홍): 『한국어 동사 구문 사전(韓国語動詞構文辞典)』 홍 재성(Hong, Cay-Seng) (1997)

て成長し、最後は死ぬ直前まで、という一連の過程が「老いる」の意味)が語彙の意味の中に含まれている。^{*17} また、「nulk-ta」に「-ess(였)-」が付加されることによって、ある設定時点に「老いていない状態」から「老いた状態」への変化が達成された、という意味合いが生じることになり、その変化の結果が発話時にも有効である、つまり現在の状態の解釈になる、と見る立場である(李南淳(1981)、韓東完(1986)など)。李南淳(1981)はこのような「hayss-ta(했다)」が表す「完了」的な意味は、動詞の特性によって現れる文脈的な意味にすぎないとしており、韓東完(1986)は、現在の状態からその状態を引き起こした出来事が類推できるとしている。簡単に言えば、「語用論的な意味」として説明しようとする立場である。なお、生越(1997)、井上・生越(1997)では、現在の状態を表す「hayss-ta」形について「語用論的な制約」として説明しており、これらの研究も、広い意味での「語用論的な意味」のタイプとして位置づけられる。

しかし、(21)や(29)のような「単純状態」の場合は、そもそもその状態を引き起こした出来事などはないので、「語用論的な意味」として処理しようとする試みも部分的な説明にしかない。

(29) 그녀는 (아직) 젊었다. (KAIST-2193)

kunye-nun (acik) celm-ess-ta

彼女 は (まだ) 若い タ

彼女は(まだ)若い。

(29)も、主体の現在の属性を表す文であり、「hayss-ta」形が用いられている。「celm-ta」の意味の中に変化過程などが含まれているとは考えられない。(29)を、「語用論的な完了の意味」として説明することには無理がある。なお、これらの例について、仮に「語用論的な完了の意味」とする説明が正しいと仮定してみても、それではなぜ「hako iss-ta(하고 있다)」・「hay iss-ta(해 있다)」形が成立しないかという問題に対する答えにはならない。

(30) 점심 때 돌아온 그의 큰형은 40대인데도 그동안 꽤

cemsim ttay tolao-n ku-uy khunhyeng-un 40tay-inteyto kutongan phek

昼 頃 帰って来た彼の 長兄 は 40代なのに その間 随分

昼頃帰ってきた彼の長兄は、40代なのにその間随分

*17 Kim, Cha-Kyun(1985)では、「nulk-ta」を「過程動詞」としている。

늙어 있었다. (*늙었다) (KAIST-2216)

nulk-e iss -ess-ta (*nulk -ess-ta)

老いるテイル タ (*老いる タ)

老いていた。

(30)は、ある兄弟の再会する場面を文脈とする実例であるが、「kutongan(その間)」が表す期間中に「phek(随分)」という程度の「変化」が「長兄」にあった、という意味を表す。(30)のような文脈では、(28)とは対照的に「hay iss-ta(해 있다)」形だけが成立しており、「hayss-ta(했다)」形は成立しない。

いずれにしても従来の説明では、(28)と(30)の違いについて説明することが困難であろう。

以上で簡単にまとめたように、先行研究においては、「hayss-ta」形が現在の状態を表す場合について、①あくまでも「-ess(였)-」は、過去を表すテンスマーカであり、現在の状態を表す場合も「-ess-」のテンス的な意味機能から派生している、②「-ess-」は、アスペクトマーカではあるが、接続する語彙に制限があり(二次的・周辺的であるため)、現代韓国語のテンス・アスペクト体系には反映すべきではない、③「語用論的な完了の意味」と見る立場、といった三つの解釈が行われている。

しかし、後述するように、この三つの立場には、いずれも問題点がある。以下では、先行研究の問題点についてもっと詳しく論じる。

4. 先行研究の問題点に対する検討

4.1. 「talm-ta」のアスペクト的クラス

(31)a 다로는 (점점) 아버지를 닮는다.

talo -nun cemcem apeci-lul talm -nun-ta

太郎 は だんだん 父 を 似る

太郎は(だんだん)お父さんに似てきている(似ていく)。

b 자식은 부모를 닮는다.

casik -un pwumo-lul talm-nun-ta

子供 は 親 を 似る

子供は親に似るものだ。

(31)a は、例えば、発話者が数回にわたって「太郎」の変貌ぶり(成長過程でもかまわない)を観察しており、発話者が観察した一連の変化と同じ傾向の変化が、発話時においても進行中(その過程のなか)であるという意味を表す。(31)a は、要するに現在のことを表している。

(32) 다로는 지금 책을 읽는다.

talo -nun cikum chayk-ul ilk -nun-ta

太郎は 今 本 を読む

太郎は今本を読んでいる。

現代韓国語の場合は、非状態動詞であっても、(32)のように、現代日本語の基本形に相当する「han-ta(한다)」形で現在のことが表せるので、「talm-ta」が状態動詞かどうかについては(31)だけ見てはまだ分からない。しかし、「talm-ta」は、一般的な非状態動詞とは違って、いかなる場合であっても「han-ta(한다)」形で未来の意味を表すことができない。

(31)b は、一般的な事実(総称的な事実)を述べる文であるため、考察の対象にはならない。

久野(1973)では、現代日本語を対象にして、述語のもつ状態性について次のように述べている。(pp.79 ~ 89)

(33) [+状态的]動形詞(動詞・形容詞・形容動詞)は、現在時の状態を指し、
[-状态的]動形詞は、未来時の動作を指すか、現在時の習慣的動作、或いは普遍的動作を指す。(中略) 意味上[+状态的]な動形詞が目的語をとる際は、目的語を表す助詞として「가」が用いられる。^{*18}

(21)b のように目的語に相当する名詞句に「이/가(i/ka)」格(現代日本語の「ガ格」に相当する)が現れる。久野(1973)の説明を念頭に置きながら(21)b 及び前述した(31)a(「talm-nun-ta」の形で現在を表す)について考えてみると、先行研究の指摘のように、現代韓国語の「talm-ta」も状態動詞ということになるが、結論をだす前に解決しなければならない問題がいくつかある。一つは、(21)a に見られる「을/를(ul/lul)」格(現代日本語のヲ格にあたる)について説明しなければならない。もう一つは、「talm-ta」は、典型的な状態動詞の場合とは異なって、(21)のように「-ess(였)-」形による表現しか許容しないのは何故か、

*18 下線は、安によるものである。

という問題は依然残っている。

(34) 책상 위에는 빈병이 있었다.

chayksang wi-ey-nun pi-n pyeng-i iss -ess-ta

机 上 には 空き瓶 が あるタ

机の上には空き瓶があった。

例えば、「iss-ta(있다)」の場合は、一般的には(34)のように「iss-ess-ta」のままでは、現在の状態を表すことは不可能である。また「iss-ta」は、決して「ul/lul」格をとることもない。

最後に「talm-ta」の特徴として取りあげられるのは、「talm-ta」は、(35)(36)のように命令法(imperative mood)的な表現が可能である点である。

(35) 다로야, 형을 좀 닮아라.

talo-ya, hyeng-ul com talm -ala

太郎君、兄 を 少し 似る 命令

太郎君、お兄さんを少し見習いなさい。

(36) 좋은 점은 서로 좀 닮아라. (흥)

coh-un cem -un selo com talm-ala

いい ところはお互いに少し似る 命令

いいところはお互いに少し見習いなさい。

Dowty(1979)では、命令法(Imperatives)が可能なのは non-statives だけであると述べており、Dowty(1979)によると、(35)と(36)は「talm-ta」が非状態動詞である可能性を示す例になる(p. 55)。

以上で観察した内容をまとめてみると、現代韓国語の「talm-ta」に関しては、アスペクト的クラスが異なる二つのタイプ(状態動詞と主体変化動詞)に分けて考えるべきかもしれないが、これ以上のことは分からない。

しかし、前述したように、仮に「talm-ta」が状態動詞であるとしても、状態化マーカーと共起しないことに対する答えにはなるが、「なぜ「hayss-ta(있다)」形による表現しか成り立たないか」という問題に対する答えにはなっていない。また、(27)について述べたように、「tachi-ta」のような非状態動詞の中にも文法的な状態化マーカーと共起できない例が存在することなど、先行研究には、まだ十分説明されていない部分が多いように思われる。次の「sayngki-ta

(생기다)」の例についても(27)の場合と同様な指摘が可能である。^{*19}

(37) 그 의자는 이상하게 생겼다. (*생기고 있다 / *생겨 있다)

ku uyca -nun isangha-key sayngki -ess-ta

その椅子は おかしく できる タ

その椅子は不思議な形をしている。

4.2. 「-ess-」形による現在の状態を表す表現は、「-ess-」のテンス的な意味機能から派生した表現か

ここでは、改めて「khu-ta(크다; 大きくなる・育つ・成長する)」の例を取りあげる。

(38) (久しぶりに友人のお宅を訪問し、友人のお子さんに)

타로는 키가 많이 커구나. (*크고 있다 / *커 있다)

talo -nun khi-ka manhi khu -ess-kwuna (>khe-ss-kwuna)

太郎は 背 が たくさん大きくなる タ なあ

太郎は背が本当に大きくなったなあ。

(38)も、前述した「talm-ta」などと同様に、括弧に示したような文脈では「hako iss-ta(하고 있다)」もしくは「hay iss-ta(해 있다)」形に言い換えることは出来ない。文全体は、発話時における「太郎」の属性を表す。例えば、発話者は前にも「太郎」に会ったことがあり、前回会ったときの身長から、現在の身長への変化が達成済みである(成長している)と把握しており、現在も変化後の状態が続いていることを表す。「khu-ta」は、成長していく変化過程そのものが語彙の意味であり、「khu-ta」の意味には絶対的な限界点(成長が完成される)は存在しないが、「-ess(였)-」が付加されることによって相対的な限界点を乗り越えた、という意味が含意されるようになると思われる。

これらの例については、先行研究において「-ess-」形の「現在の状態」を表す用法として分類されながらも、「-ess-」はあくまでもテンスとしての意味機能が中心的であり、現在の状態を表す場合は、周辺的である(あまり生産的ではない)と記述されてきた。「テンス(過去)からの派生」と見る理由としては、本章でいう「状態変化が達成された(相対的な限界点を乗り越えた)時点」が発

*19 例えば、浜之上(1991)では、「talm-ta」「sayngki-ta」等を「状態動詞」として分類している。

話時点から見て、「発話時以前」になりやすいことからであろうと思われる。
しかし、前節で取りあげた(16)を含めて、以下のような(39)、(40)に対しては、
どう説明するのか疑問である。

- (39) 20년 후에는 나도 늙었을 것이다(죽었을 것이다).

20-nyen-hwu-ey-nun na -to nulk -ess-ul kes -ita(cwuk-ess-ul kes-ita)

20年後には僕も老いるタであろう(死ぬタであろう)

20年後には僕も老いているであろう(死んでいるであろう)。

- (40) 20년 후에는 아이들도 다 컸을 테니까, …

20-nyen-hwu-ey-nun ai -tul -to ta khu -ess(>khe-ss)-ul theynikka, …

20年後には子供たちも全部成長するタ であろうから、…

20年後には子供たちも全部成長しているであろうから、

(39)、(40)は、20年後のことについて想像している文(いわゆる未来パーフェクト的な意味)であり、このような文に現れる「-ess(였)-」については、テンス(過去)からの派生という説明は困難であろう。

4.3. 現在の状態を表す「-ess-」形は、果たして非生産的なのか。

先行研究において、「-ess-」形が現在の状態を表す意味機能について「二次的」な状態であるとする根拠としては前述したように「語彙的な制限がある」こと、つまり生産的ではない点をあげている。しかし、詳しく調べてみると、生産的ではないという主張は否定せざるを得ない。

- (41) (家の修繕工事が終わった後、訪ねてきた友だちが感想を語る)

방이 밝아 졌네.

pang -i palk-a ci -ess-ney(>palk-a cyess-ney)

部屋が明るくなるタ

部屋が明るくなったね。

例えば、(41)は「palk-ta(밝다)」という形容詞(語彙の意味の中に決して変化過程の意味を含まない)に、「지다(ci-ta)」が補助用言として用いられた場合である。「palk-a ci-ta」は、「ci-ta」のもつ意味により当然ながら変化動詞化する。さらに「-ess-」が付加されることにより、全体は「現在の状態」の意味を表すようになる。「-ess-」は、当該の状態変化が完了していることを表す。補助用言を使っているので、このような例は、きわめて生産的である。

(42) 손에 굳은 살이 박혔다.^{*20}

son-ey kwut-un sal -i pak -hi -ess-ta

手にかたい肉が打つ受動タ

手に胼胝(たこ)ができています。

(42)の「pak-hi-ta(박히다)」は、「pak-ta(박다; 打つ)」に「히(-hi-; ここでは、受動化接辞)」が付加されたケースである。「pak-ta」は、動詞がもつ固有の意味から見て動作動詞であり、その受動形である「pak-hi-ta」の意味の中に「対象(theme)の状態変化の過程」が含まれているとは考えられない。しかし(42)は、場所(手)における状態変化、つまり今までその場所に存在しなかったもの(胼胝)が新たに現れるという意味として、発生による状態変化が起きていることを表しており、文全体は現在の状態の意味を表す。次の(43)についても同様なことがいえる。

(43) (果樹園を経営している人が、今年の作況について語る)

올해는 감이 많이 열렸다(*열려 있다).

olhay-nun kam-i manhi yel -li -ess-ta

今年 は 柿 がたくさん あける 受動タ

今年 は 柿 がたくさん 実 っている。

(42)や(43)のような文については、先行研究では疑似受動文として分類している。^{*21}(42)や(43)は動詞に「-hi-」と「-li(리)-」という受動化接辞が付加されているにもかかわらず、対応する能動文が想定できないことから「疑似受動文」として分類される。疑似受動文としての位置づけには問題がないか、という議論はさて置き、これらの例には、以下のような注目すべき点がある。一つは、これらの例は「ある種の状態変化(ここでは発生による状態変化)がすでに起きており、発話時においてもその状態が続いている」という意味である。もう一つは、他動詞から作られた一種の派生自動詞(受動化接辞による派生)が用いられている点である。

先行研究の指摘のように「-ess-」が付加される語彙に制限があるとしても、

*20 (42)については、安平鎬(1997b)を参照されたい。(pp. 14-27)

*21 「疑似受動文」という用語は、Wu, In-Hyey(우 인혜, 1997)による。なお、現代韓国語の疑似受動文に関するより詳しい説明は、安平鎬(1998b)を参照されたい。

補助用言を用いたり、受動接辞による派生自動詞を利用していることから見て、現在の状態を表す「-ess(으)-」の機能を二次的とするのは説得力に欠ける。当然、現代韓国語のテンス・アスペクトの体系にも反映すべきであろう。

(42)や(43)における「-ess-」は、繰り返して述べているように(何時そのようになったか、というのは明示されていないが)設定時点において当該の状態変化がすでに達成されている、という意味を表す一種のアスペクトマーカである。

(44) 안경에 김이 서렸다.

ankyeng-ey kim -i seli -ess-ta

眼鏡 に水蒸気が つく タ

眼鏡がくもっている(眼鏡に水蒸気がついている)。

(45) 감자에 싹이 났다(나왔다).^{*22}

kamca -ey ssak-i na -ss-ta

ジャガイモに芽 が 出るタ

ジャガイモに芽が出ている。

(44)は「서리다(seli-ta; かかる)」という自動詞(対応する他動詞がない)が述語として用いられた例であり、(45)は「나다(na-ta; 出る)」という移動動詞が述語として用いられた例である。また、(44)と(45)は述語に「-ess-」が付加されることによって文全体は現在の状態を表している。これらの例の存在も考え合わせると、「-ess-」が付加されて現在の状態を表す語彙に制限がある、という説明には納得できないと言わざるを得ない。

5. なぜ、「hayss-ta」形が現在の状態を表せるのか

3.節と 4.節では、先行研究について概観しながら現代韓国語の「hayss-ta(효다)」形が現在の状態の意味を表す例について考察した。その結果、先行研究においては、現代韓国語「hayss-ta」形がなぜ現在の状態の意味を表せるのか、しかも文法的な状態化マーカとは共起できず、「-ess(으)-」による表現しか成立しない例が存在する理由について十分な説明がなされていないことが明らかになった。

以下では、なぜ「hayss-ta」形が現在の状態を表せるのか、しかも文法的な

*22 (45)については、安平鎬(1998a)を参照されたい。(pp. 98-102)

状態化マーカーとは共起できず、「hayss-ta」形のみが成立する例が存在する理由について述べる。

「状態(stative)」には少なくとも三つのタイプがある。まず、主体の属性を表す単純状態のタイプがある。次は、全く時間的な制約に縛られない恒常的な状態のタイプがあげられる。このタイプは、「何時そのような状態になったか」もしくは「何時そのような状態が終わるか」が全く問題にならないタイプである。例えば、「iss-ta(있다)」を述語とする(46)のような文がこのタイプに属するが、このタイプは述語に「-ess(였)-」を付加することによって現在の状態を表すことはできない。つまり「iss-ess-ta(있었다)」にすると、現在から切り離された過去の状況を表すことになる。

(46) 지구에는 위성이 한개 있다. (# 있었다^{*23})

cikwu-eynun wiseng-i hankay iss-ta(iss -ess-ta)

地球 には 衛星 が一つ ある (ある タ)

地球には衛星が一つある(あった)。

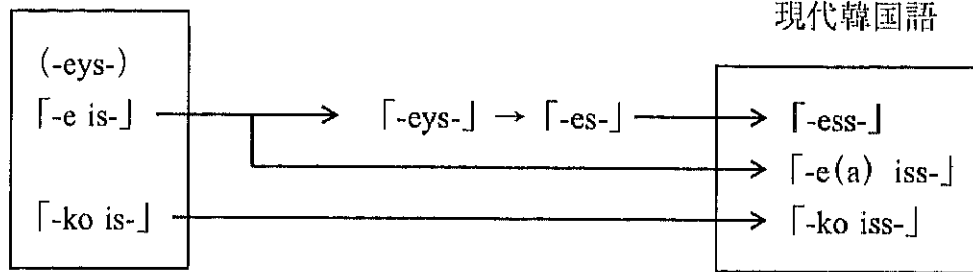
もう一つのタイプとしては、「何時そのような状態になったか」といった生起時点の後に続く状態のタイプが考えられる。このタイプは、ある状態変化が完成した後、新しく生起する状態のことを指す。

さらに「単純状態」「ある状態変化が完成したこと」と「生起後の状態」をどう言語化するかによって、各言語間に具体的な違いが現れると思われる。例えば、現代日本語の場合は、一般的に、「完成した」ことに注目すれば「シタ」形で表し、「単純状態」「生起後の状態」に注目すれば「シテイル」形で表す。一方、現代韓国語の場合は、場合によっては三つとも「hayss-ta(했다)」形で表現することも可能であり、場合によっては「生起後の状態」のほうは「hay iss-ta(해 있다)」形で表現する、ということになる。

現代韓国語の「hayss-ta」形が現在の状態の意味を表す場合、言い換えれば、以上で述べたような「単純状態」と「生起後の状態」を、「hay iss-ta」形ではなく「hayss-ta」形で表す場合であるが、現代韓国語ではなぜこのようなことが可能なのであろうか。

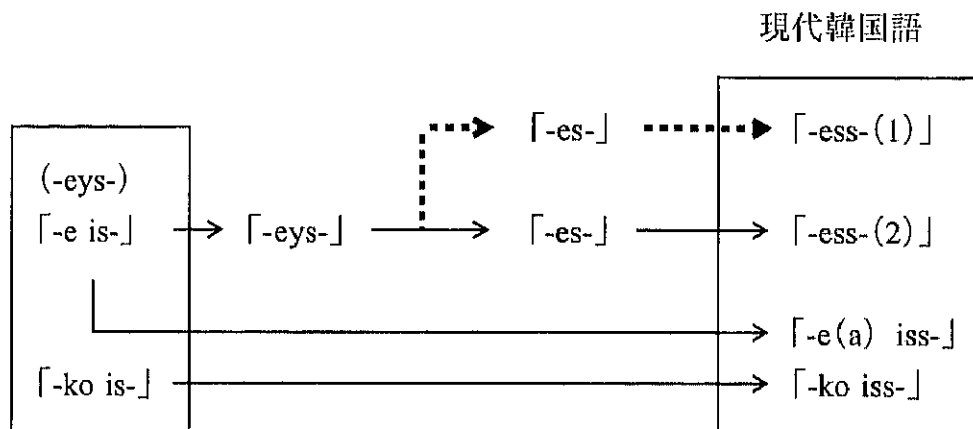
*23 「#」は、非文ではないが、意味の異なる文であることを表す。

(7)



2.1.2 節では現代韓国語の「-ess(엷)-」の歴史的成立過程について、先行研究の内容を(7)のようにまとめている。中世韓国語においては「ey(에)」が二重母音であったため、「-eys(엷)-」は「-e is(어 잇)-」の単なる表記上の縮約形であった可能性が指摘されており、十五世紀末以来「-e is-」>「-eys-」>「-es(엷)-」>「-ess-」という変化を経て現在に至っている、ということである。

(47)



(「-ess-(1)」;「過去」 / 「-ess-(2)」;いわゆる「完了」)

現代韓国語では、なぜ「hayss-ta(엷타)」形で現在の状態を表すことが可能であろうかという質問に戻るが、筆者は(47)に示したように、未だに中世韓国語の「-eys-」相当の「-ess-」が²⁴残存している²⁴と見なすことによってこれらの問題が解決できるのではないかと考えている。²⁴

*24 Wu, In-Hyey(1988)にも同様な指摘がある。開化期(19世紀末から20世紀初)の韓国語の「-es-」は、テンス的には「過去」を、アスペクト的には「完結(持続)」を表すとする。なお、「過去」と「完結(持続)」の意味が明確に区別できない場合があるとしているが、これは、中世韓国語の「-e is-」から生成された「-es-」が完全に過去の意味に変わったとは考えられないからであると説明する。(p. 223)

中世韓国語の「-e is(어 잇)-」と「-eys(옛)-」は、状態の(不完了的な)意味を表していた。中世韓国語においては二重母音であった「ey(에)」が十七世紀前後に単母音化することによって「-eys-」が「-e is-」とは違う発音になったと見られる。ということで、「-eys-」と「-e is-」は、単なる表記上の縮約形ではあり得なくなっただけとも言えるが、逆に単母音になることによって、「(-eys->)-es(엇)-」という形式には中世韓国語の存在動詞「is-ta(있다)」の語彙的な意味が含意されなくなり、単純状態などの現在の状態を表す(非存在文的な表現を表す)状態化マーカーとして機能することが可能になったであろうと思われる。

なお、これには、現代韓国語の「hay iss-ta(해 있다)」形における「iss-ta(있다)」には依然として固有の語彙的な意味が残っているため^{*25}、存在文的な性質をもたない「属性」等の単純状態を表す構文には「hay iss-ta(해 있다)」形が用いられなかったという事情も重要な要因として働いていると考えられる。結果的には、現代韓国語においては、「hayss-ta」形と「hay iss-ta」形が相補分布的に、非存在文的な「現在の状態(単純状態とパーフェクト相現在)」は「hayss-ta」形が表し、運動・作用の結果継続を表す継続相＝状態パーフェクトは「hay iss-ta」形が表すということになる。

次節では「hayss-ta」形による現在の状態を表す表現と「hay iss-ta」形による結果状態を表す表現との違いについて具体的に述べる。

6. 「hayss-ta」形による現在の状態を表す表現と「hay iss-ta」形による結果状態を表す表現との違いについて

6.1. 「hayss-ta」と「hay iss-ta」形の競合

本節では、「hayss-ta」形による現在の状態を表す表現のうち、特に「hayss-ta」形のみが成立し、「hay iss-ta」形は成立しない表現を取りあげる。具体的には、「hayss-ta」形のみが成立する理由(＝「hay iss-ta」形が成立しない)理由について述べる。

6.1.1 「tachi-ta」

*25 現代韓国語の「hay iss-ta」形において「iss-ta」が完全に文法化されておらず、固有の語彙的な意味・機能が残っているということに関しては、第三章を参照されたい。なお、特に、現代韓国語の「hay iss-ta」は、現代日本語の「シテイル」とは文法化の度合いが異なるため、現代日本語と同様な基準(つまり、現代日本語の「シテイル」に相当する「hay iss-ta」形が成立するか否か)によって現代韓国語の動詞を分類することについては再検討する必要がある。

- (48)a 인호는 넘어져서 무릎이/다리가 크게 다쳤다. (Hong-112)*²⁶
 (*다치고 있다 / *다쳐 있다)
 inho-nun nemeci-ese(>nemecyese) mwuluph-i/tali-ka khukey tachyess -ta
 (*tachi -ko iss-ta / *tachye iss-ta)
 (人名)は 転ぶ て 膝 が/足 が 大きく怪我するタ
 (怪我するテイル/怪我するテイル)
 (人名)は転んで膝(足)が大怪我した。
- b 인호는 넘어져서 무릎을/다리를 다쳤다. (Hong-112)
 inho-nun nemeci-ese(>nemecyese) mwuluph-ul/tali-lul tachyess -ta
 (人名)は 転ぶ て 膝 を/足 を 怪我するタ
 (人名)は転んで膝(足)を怪我した。

前述したように、(48)の「tachi-ta」等について先行研究では、「hay iss-ta(해 있다)」形が成立しないことと文全体が現在の状態を表すということから、「状態動詞」として分類している。筆者による調査(インフォーマント調査とコーパスを用いた調査)でも「hako iss-ta(하고 있다)」・「hay iss-ta」形の用例は見つからないが、「tachi-ta」を状態動詞とする説明には無理があるように思われる。

- (49) 그 약을 먹었더니 씻은 듯이 나왔다. (Hong-85)
 ku yak-ul mek -ess-teni ssis -un tus-i na(s)-ass-ta
 その薬を 食べるタ ので 洗う タように 治る タ
 その薬を飲んだらすっかり治った。
- (50) 그는 다친 다리가 이미 다 나아 있었지만,... (KAIST-2248)
 ku-nun tachi-n tali-ka imi ta na(s)-a iss-ess-ciman
 彼 は 痛めた足 がもう全部治る テイルタ が
 彼は痛めた足がもうすっかり治っていたが、

(49)と(50)の「nas-ta(났다)」は、現代日本語の「治る」の意味にあたる動詞であり、「tachi-ta」の対義語の一つと言える。(50)の「nas-ta」は「tachi-ta」とは対照的に「hay iss-ta」形が成立している。もちろん「nas-ta」のほうは「hay iss-ta」形が成立するからといって、「tachi-ta」が状態動詞ではないという積極

*26 例文(27)の再掲である。

的な理由にはならない。しかし、動詞のアスペクトクラスが類似すると思われる「nas-ta」と「tachi-ta」が、前者は非状態動詞であり、後者は状態動詞である、という説明には納得できない部分がある。そもそも「hay iss-ta」形が可能かどうかという基準をもって動詞を分類すること自体に問題があるのではないか、と疑うべきではなかろうか。

6.1.2 アスペクトクラスが類似すると思われる語彙との比較

ここでは、「nas-ta」の他に、「kolm-ta(곶다)」「kwup-ta(굽다)」「na-ta(나다)」の例を以下に示す。

- (51) 영화는 상처(다리)가 곶았다. (Hong-39)

yenghuy-nun sangche(tali)-ka kolm-ass-ta

(人名) は 傷(足) が 膿む タ

(人名)は傷口(足)が膿んだ。

- (52) 그의 손은 퉁퉁 부어 있었고, 어떤 손가락은

ku-uy son-un thwungthwung pwu -e iss- ess-ko, etten sonkalak-un

彼の 手 は ぱんぱんに 腫れるテイルタで, ある 指 は

彼の手はぱんぱんに腫れていて、指の一つは

아직도 곶아 있었다. (KAIST- 3628)

acik-to kolm -a iss -ess-ta

いまだに膿む テイルタ

まだ膿んでいた。

(51)の「kolm-ta」は、「nas-ta」と同様に「hayss-ta(헛다)」形で現在の状態を表す。(52)のように「hay iss-ta(헤 있다)」形も成立しており、「tachi-ta」とは対照的である。

- (53) 태우는 다리가 안으로 굽었다. (Hong-43)

thaywu-nun tali-ka an-ulo kwup -ess-ta

(人名) は 足 が 内側に 曲がる タ

(人名)は足が内側に曲がっている。

- (54) 순철의 등은 활등같이 굽어 있었다. (KAIST-2243)

swunchel-uy tung-un hwaltung-kathi kwup -e iss -ess-ta

(人名) の背中 は 弓 のように曲がるテイル タ

(人名)の背中が弓のように曲がっていた。

(53)の「kwup-ta」は、(51)の「kolm-ta」等の場合と同様に「hayss-ta(했다)」形で現在の状態を表す。「kwup-ta」も「hay iss-ta(해 있다)」形が可能である。類例には「hwi-ta(휘다)」がある。

- (55) 영화는 다리가 많이 휘었다. (Hong, p.486)

yenghuy-nun tali-ka manhi hwi -ess-ta

(人名)は 足 が 多く 曲がるタ

(人名)は足が大きく曲がっている。

- (56) 그 아이는 다리가 가늘고 휘어 있었다. (KAIST-2239)

ku ai-nun tali-ka kanul-ko hwi -e iss -ess-ta

その子 は 足 が 細い テ 曲がる テイル タ

その子は足が細くて曲がっていた。

次の(57)から(61)の「na-ta」は、現代日本語の「出る」「生ずる」「生まれる」の意味にあたる。「na-ta」も「kolm-ta」「kwup-ta」等と同様に「hayss-ta」形でも現在の状態を表すことが可能であり、「hay iss-ta」形でも表すことができる。

- (57)a 영호의 손에 상처가 났다. (Hong-67)

yengho-uy son-ey sangche-ka na -ss-ta

(人名)の 手 に 傷 が できる タ

(人名)の手に傷ができた。

- b 영호의 손에 상처가 나 있다. (作例)

yengho-uy son-ey sangche-ka na(a) -iss-ta

(人名)の 手 に 傷 が できる テイル

(人名)の手に傷ができています。

- (58) 이쪽에 이리들이 지나간 발자국이 났다. (Hong-67)

iccok-ey ili-tul -i cinaka -n palcakwuk-i na -ss-ta

こっちに狐 たちが通りすぎるタ 足跡 が できる タ

こっちに狐が通りすぎた足跡ができています。

- (59) 눈 위에 사람들이 지나간 신발 자국이 나 있다. (Hong-67)

nwun wi-ey salam-tul -i cinaka -n sinpal cakwuk-i na -(a)iss-ta

雪 上 に 人 たちが通りすぎるタ 靴 足跡 が できる テイル

雪の上に人々が通り過ぎた靴の跡ができています。

- (60) 우리 동네에 새 길이 났다. (Hong-67)

wuli tongney-ey say kil-i na -ss-ta

我々の 町 に 新しい道がでる タ

我々の町に新しい道路ができた。

- (61) 낙타는 등에 커다란 혹이 나 있다. (Hong-67)

naktha-nun tung-ey khetala-n hok -i na -(a) iss-ta

ラクダは 背中に大きな こぶがでる テイル

ラクダの背中には大きなこぶがある。

このように「kolm-ta」「kwup-ta」「na-ta」等は、「hayss-ta(했다)」形でも現在状態を表すことが可能であり、「hay iss-ta(해 있다)」形でも表すことができる。「tachi-ta」の「hay iss-ta」形が成立しないのとは対照的である。

6.1.3 「tachi-ta」は、なぜ「hay iss-ta」形が成立しないのか

(48)の「tachi-ta」を述語とする文は、(62)が成立しないことから「(足の)傷」を話題にすることができないことがよく分かる。

- (62) * 상처가 다쳤다.

sangche-ka tach yess-ta

傷 が怪我する タ

(訳文省略)

一方で、「na-ta」「nas-ta」等は、(63)と(64)から分かるように、「(足の)傷」を話題にすることが可能である。

- (63) 상처가 났다 / 상처가 나 있다 : 「na-ta(でる)」

sangche-ka na -ss-ta / sangche-ka na -(a) iss-ta

傷 がでるタ 傷 がでるテイル

傷ができた(できている)。

- (64) 상처가 나았다 / 상처가 나아 있다 : 「nas-ta(治る)」

sangche-ka na(s)-ass-ta / sangche-ka na(s)-a iss-ta

傷 が治る タ 傷 が治る テイル

傷が治った(治っている)。

(62)と(63)(64)の違いは何を意味するのであろうか。これらの違いについて

は、以下のように説明することができる。つまり、次の(65)と(66)における「tali (다리; 足)」の意味役割がそれぞれ異なることから生じる違いではないかと考えられる。

(65)a 다리가 다쳤다.

tali-ka tach yess -ta

足 が 怪我する タ

足が怪我した。

b 다리가 나았다(났다).

tali-ka na(s)-ass-ta(na -ss-ta)

足 が 治る タ (でるタ)

足が治った。 / 足がでた。

(66)a * 다리가 상처가 다쳤다.

tali-ka sangche-ka tach yess-ta

足 が 傷 が怪我する タ

(訳文省略)

b 다리가 상처가 나았다(났다).

tali-ka sangche-ka na(s)-ass-ta(na -ss-ta)

足 が 傷 が治る タ (でるタ)

足が傷が治った。 / 足が傷ができた。

(65)の「tali」は、変化の対象(THEME)で間違いないであろう。問題は(66)であるが、(66)aは成立しないのに対し、(66)bは成立している。筆者は、(66)のような二項述語文の場合は、第一項と第二項の間の関係—ここでは「tali」と「sangche(상처; 傷)」の関係—が「存在場所」と「その場所にある(いる)存在物」という関係としてとらえられるか否かによって、「hay iss-ta(해 있다)」形の許容度が決まるのではないかと考えている。つまり、「tachi-ta」の場合は「場所」相当の(場所としてとらえられる)項がないから「hay iss-ta」形が成り立たないのであろう。

(63)(64)の「hay iss-ta」形の例(「sangche-ka na iss-ta(naa iss-ta)」)には、かなり欠落感が感じられる。先行文脈などで場所相当の項が補わなければ欠落感が生じることと考えられる。Ceng, Mwun-Swu(1984)にも同様な指摘があるが、Ceng(1984)には、(67)のような文に対し、「裏山に」という名詞句がない文はかなり欠落感があって文として成立しない、という指摘がある。

(67) 뒷산에 강아지가 죽어 있다.

twissan-ey kangaci-ka cwuk -e iss-ta

裏山 に子犬 が死ぬ テイル

裏山に子犬が死んでいる。

詳しい内容は、第三章を参照されたいが、特に現代韓国語の「hay iss-ta(해 있다)」形における補助動詞「iss-ta(있다)」は、完全に機能語化されておらず、固有の語彙的な意味・機能をもっていると考えられる。(63)(64)の「hay iss-ta」形の例に欠落感が感じられるのも「hay iss-ta」形が存在文的であることを示す証拠と考えられる。このように「hay iss-ta」形が成立する文の場合は、相当存在文的な特徴を有するということであるが、そのために、「tachi-ta」を述語とする文のように、主体(「tali」)が存在物的な意味にはならない文の場合は、「hay iss-ta」形で表現することができないのであろう。

6.2. 「hayss-ta」形と「hay iss-ta」形が同時に成立する場合について

(42) 손에 굳은 살이 박혔다.

son-ey kwut-un sal -i pak -hi -ess-ta

手にかたい肉が打つ受動タ

手に胼胝(たこ)ができています。

(68) 손에 굳은 살이 박혀 있다.

son-ey kwut-un sal -i pak -hi -e iss-ta

手にかたい肉が打つ受動テイル

手に胼胝ができています。

これまで述べてきた本章での主張内容が正しければ、(42)と(68)のように「hayss-ta(혔다)」形と「hay iss-ta(해 있다)」形が同時に成立する文についてもその違いを予想することができる。(68)のような「hay iss-ta」形の文は、基本的には存在文であるが、主体の「存在様態(どのように存在するか)」を表す文なのである。これに対し、(42)のような文は、存在文かどうかについては無標である。なお、(42)のように、(68)とほぼ同義として解釈される(「hay iss-ta」形に言い換えられる)場合もあれば、(20)(21)等のように「hay iss-ta」形にはなれない場合もある。以上の説明が正しいことは、以下の例からも確認できる。

(43) (果樹園を経営している人が、今年の作況について語る)

올해는 감이 많이 열렸다(*열려 있다).

olhay-nun kam-i manhi yel -li -ess-ta

今年 は 柿 がたくさん あける 受動 タ

今年は柿がたくさん実っている。

例えば、(43)は、単に今年の作況を語るだけの文であるので、「柿」が存在物としてはあまり意味がない。単なる対象(THEME)である。(43)では、「hay iss-ta(해 있다)」形が成立しないが、(69)のように「場所」の意味を表す名詞句がある文においては、「hay iss-ta」形は問題なく成立している。(69)は、場所名詞句を省略すると、かなり欠落感が生じることからも存在文的であることが確認できる。

(69) 이쪽 가지에 감이 많이 열려 있네(달려 있네).

iccok kaki-ey kam-i manhi yel -li -e iss-ney

こちら枝 に 柿 がたくさん あける受動 テイル

こちらの枝に柿がたくさんついているね。

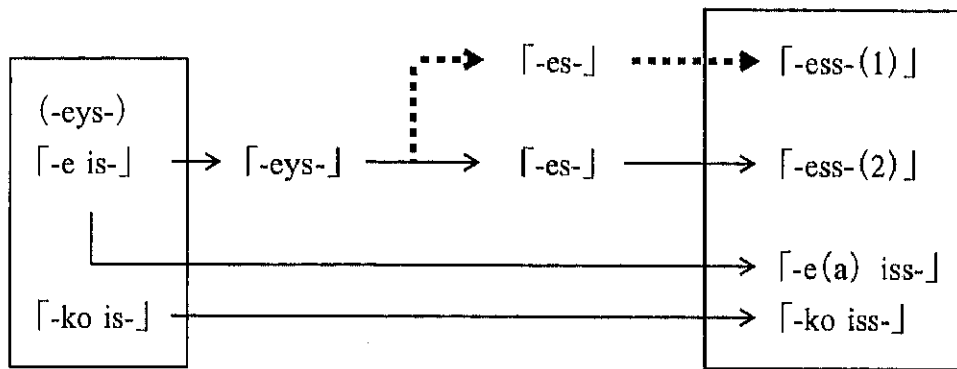
本章で取りあげた「talm-ta」、「khu-ta」、「nulk-ta」、「kyelhonha-ta」等の場合は「hay iss-ta」形が成立しなかった。なぜ成立しないかという理由については、第二項にあたる名詞が、当該の状態変化が完成した後に新しく生起した存在物としてあまり意味をもたないことから起こる現象なのである。

7. まとめ

第四章では、最初に日韓両言語の「タ」と「-ess(있)-」に関する概観を行った上で、特に現代韓国語の「hayss-ta(햇다)」形で現在の状態を表す場合について考察した。本章での主張内容を簡単にまとめると以下ようになる。

	現代韓国語	現代日本語
単純状態	「hayss-ta」形	「シテイル」形
動作パーフェクト現在	「hayss-ta」形	「シタ・シテイル」形

典型的(非存在文的)な現在の状態を表す表現をめぐっては、両言語間に上記のような違いが見られる。特に現代韓国語ではこれらの表現を「hayss-ta(現代日本語の「シタ」にあたる)」形で表すが、その理由については、以下のように述べた。



(「-ess-(1)」;「過去」 / 「-ess-(2)」;いわゆる「完了」)

「hayss-ta(했다)」形で現在の状態を表すことができる理由としては、15世紀中頃、不完成的な意味を表していた「-eys(엿)-」の用法が依然として現代語に残っていると見なすことによって解決できると主張した。なぜ、そう考えなければならないかという問題については、以下のように説明した。

韓国語における「-e is(어 잇)-」>「-eys(엿)-」>「-es(엇)-」>「-ess(읻)-」という変化は、存在動詞「is-ta(있다)」の文法化過程としてとらえることができるが、現代韓国語の「hay iss-ta(해 있다)」には「iss-ta(있다)」の意味が強く残っている(完全に機能語化されていない)ため、非存在文的な「現在の状態」を表す表現は「hay iss-ta」形で表現できないという背景があり、「hayss-ta」形のまま生き残っているのである。ここで「hayss-ta」のまま、と表現したのは、中世韓国語の母音「ey(에)」が単母音化した結果、形だけ変わったという意味である。

従来の現代韓国語のアスペクト研究においては、「hako iss-ta(하고 있다)」・「hay iss-ta(해 있다)」形が成立するか否かという基準によって動詞のアスペクトクラスを分類するのが一般的であるが、現代韓国語の「hako iss-ta」「hay iss-ta」は、現代日本語の「シテイル」とは文法化の度合いが異なるので、再検討されるべきであると主張した。